

財団法人 黛民族舞踊文化財団

Three decorative circular ornaments, each featuring a central burst of red, yellow, and blue threads, with long, multi-colored tassels hanging from the bottom. They are arranged horizontally across the page.

舞 踊 文 化
E. T. C.

NO.6

目 次

自然人アイヌ	2
こころの歌と踊り	阿寒ユーカラ座座長
第四回行事	四宅豊次郎
東巴文化芸術	
	雲南省社会科学院麗江 東巴文化研究所編より
環境概略	5
東巴教儀式	6
木牌画	7
竹筆画経書の表紙	7
画譜	8
東巴経書	8
占卜経	9
舞踊画（東巴経書中）	10
巻軸画	10
神路図	11

＝自然人 アイヌ＝ こころの歌と踊り

阿寒ユーカラ座座長
四宅豊次郎

第四回 行事

ここで、阿寒湖アイヌコタン（集落）の年間行事について、少し記すことにしましょう。歌や踊りは祭事と共にあり欠かせないものだから。

※1月3日 アシリパノミ（新年の祈り）

新年にあたって、無病息災、安全繁栄を祈願する。

※9月末（2日間） ノッカマップ イチャルパ（供養祭）

1789年（寛政元年）、根室半島のノッカマップという地で、当時の和人の強制労働、虐待、略奪、暴力、脅迫に耐えられなくなったアイヌが蜂起した《クナシリ、メナシの戦い》で犠牲になった英霊（38名）の供養祭。（1996年で23回）

※10月8日 まりも祭（前夜祭）

9日 まりも祭（本祭）

10日 まりも祭（後祭）

この行事は、国の特別天然記念物に指定されているマリモを祠る儀式ではなく、太平洋戦争の敗戦後数年にわたり、観賞用にと全国各地へ大量に盗み持ち去られた、マリモの返還運動と、マリモが棲息している美しい阿寒湖の大自然を、永遠に護ろうという目的で、アイヌ古式を取り入れて催された行事である。北海道の自然保護運動のはしりと言っても過言ではない。くしくも札幌の《雪まつり》と同じ昭和25年に始まり、毎年つづけられて昨年（1996）で47回開催された。

全国各地から400名以上のウタリ（同胞）が参加して、祭りを盛大にしている。

これらの定まっている年中行事以外にも、歳月に応じて、大小のチセ（家屋）、プー（穀物倉）、エペレセツ（熊の檻）の建築や、丸木舟造りの際にも、古式にのっとりそれぞれの儀式を行う。

また、狩猟民族として罨、シマフクロウ、タヌキ、キツネ等のイオマンテ（霊送り）の儀式もあり、動物神に感謝の念をあらわす。

漁撈では、海岸地方で行われるアシリチェップ ノミ（新しい鮭を迎える儀式）や、シシャモ（柳葉魚）祭りなどにも参加する。



ヌサ（祭壇）に安置されたイナウ（木幣）

前は、コタンの老女を中心に女性達が精根をこめて酒造りをおこなう様子を述べて、儀式に用いるピリカトノト（よいお酒）ができた。女性達の仕事はその他に、神棚に供える各種の山海料理や、神の国へお土産にもたせる団子をつくり、果物、木の実など用意する。

男達は、祭事に必要な品々や用具の制作、点検に余念がない。その中でも一番大事な仕事がイナウケ（木幣を削る事）である。

イナウ（木幣）

アイヌ民族は祭事において、その儀式が行われる度に、それぞれの神々に新しいイナウをつくり捧げる。イナウは日本では御幣にあたるが、アイヌは紙を使わずに一本の木を削ってつくる。木はヤナギかミズキである。

阿寒湖アイヌコタンでは、《まりも祭》の場合計25本のイナウをつくる。

天上界を司る神、太陽、月などの天空界の神々。獣類、魚類を司る神、コタンコ カムイ（村を護る神＝梟神）、雌雄の阿寒岳など山々の神、水源や湖沼、河川の神々、そのほか阿寒に所縁のある神々に一本づつ捧げるために、間違えることなく注意し心を込めて木幣を削る。男衆の作業や点検が終了して、女性達の仕事も全てなし終えると、いよいよ祭事となる。

エカシ（長老）をはじめコタンの人々が、オンネチセ（大きな館）に集まる。

祭式に入る前にシントコサンケという儀式が行われる。シントコオシマツクルという酒の検査官が居て、女性達が造った酒が果してこの行事にふさわしい出来ばえであるか、否かを吟味するのである。検査官がじっくり吟味して「シーノ ^{（本当に）}ピリカ ^{（よい）}トノト」とおもむろに報告されて、はじめて祭事が始まる。（もし、検査官の許可が下りなければ、その時は御酒は元から造り直さなければならない）



長老によるカムイノミ（神への祈り）

この度の御神酒は、格別によいので儀式は始まる。司祭主をつとめる長老は囲炉裏の左側手前に座し、それに順ずる人達はその上座に位置して並び、婦女子はその後方に坐る。来賓は囲炉裏の右側の座へ案内され、男性は前方に女性は後方に坐る。男はみな胡座で坐り、女性は昔は立膝だったが、現在は正座している。

長老が一番先に、囲炉裏の中で赤々と燃えている火の神に御神酒を捧げてお祈りをはじめめる。それに続いて男衆も来賓も自己の思い思いに祈りを述べる。アイヌにと

って最も身近に居る神は火の神様である。昼夜生活に密接して一度も消えることのない火神を通して諸々の神々に心から願い祈るのである。カムイノミ（神への祈り）は元来重要なものですが、ここのテーマではないので省略して次の機会に譲ることにします。

本題の歌や踊りに入りましょう。

合唱（ロウポポ＝坐り歌）
イカムッカ サンケー イサン
ケー イサンナー
“(容器の) 蓋を 出なさい
それを出なさい はい出てきたよ”

この合唱曲は、皆んなが立ち上がって歌ったり踊る以前の坐り歌で、これを歌いながら声の調子やリズムを合わせて、次第に雰囲気（はまけ）を盛り上げてゆく、いわば競歌の一種である。

シントコ（行器）という容器の蓋を一個出し、二個出し、三個出してくる。ひとつの円い蓋を中心にして3～4名の女性が囲りに坐り、その蓋の上を手で叩いて音を出してリズムをとり、それに合わせて上記の歌をうたう。

最初にAグループがイカムッカを歌うとすぐBグループがイカムッカと入る（これが二部合唱）。三部合唱の場合は、もっと早くなりAグループがイカムと歌うと、すかさずBグループがイカムと入り、すぐさまCグループがその後に続く、輪唱である。（これは、その場において蓋を叩いて歌うか、実際に聞いてみないと、よく理解できないかも知れない）Aグループの蓋を叩く音（リズム）が小気味よく響き、歌声にも張りが出て次第に高くなってきた。B、Cグループもそれに負けじと歌う。ともすれば相手方のリズムに引き寄せられ、歌声も巻き込まれそうになる。ここが正念場、自分達のリズムと歌声をしっかりと守らなければならない。心の内で「頑張れ！」と自分自身と仲間呼びかける。一度、相手方のリズムや歌声に巻き込まれたら、もう元に戻すことはできないので敗けである。

互いのグループは微妙な音色をもち、ときには高く低く、あるいは速く遅くしながら歌う。

上手な歌い手たちの輪唱は、何とも言えないほどのハーモニーをかもしだし、辺りに居る人々の心をなごませ酔わせる。



合唱（ロウポポ＝坐り歌）
イカムッカ サンケー

東 巴 文 化 芸 術

雲南省社会科学院麗江
麗江東巴文化研究所 編



玉龍雪山の六月の雲帯

ナシ族は東巴（トンバ）文化芸術を創造しました。

ナシ族は古代羌人の末裔で、現在の人口は27～8万人、中国雲南省の西北部及び四川省とチベットとの境界地帯に住んでいます。東巴教は原始シャーマニズムと発達した宗教の間の過渡的な宗教であり、そしてそれは万物に靈魂が宿ると信じ、多神を崇拝する一方でボン教、仏教、道教等の宗教を吸収融合した多面的な文化です。

東巴は東巴教の司祭であると同時に学者、舞踊家、書道家、美術家、彫刻家でもあり、ナシ族古文化の重要な伝承者なのです。



「阿麗哩」を踊る納西族の女性たち



納西族の女性たち

東巴教儀式



東巴祭司

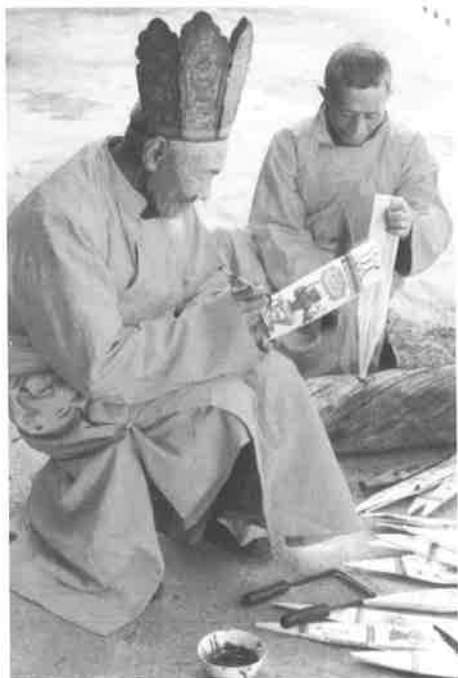
東巴教の儀式は原始宗教の“生きた化石”です。ナシ族の先祖たちは人間と自然、人間と社会という二つの大きな矛盾を解決するため三十余種の宗教儀式を創り出しました。自然の生態系のバランスを維持し、人間と自然が協調していくための“署神(自然神あるいは龍神)を祭る”儀式、戦禍を逃れ、戦勝を祈願するための“勝利神

を祭る”儀式、病気や災害から免れるための“神(疫病神)を追ひ払う”儀式、家内安全、豊作のための“五穀の神(農業神)と六畜の神(牧畜神)を祭る”儀式、“狩猟神を祭る”儀式、また死者のための“亡霊を祖霊に格上げする”儀式等があります。

どの儀式をとってみても一種の絵画の展示会のようなもので、木牌画(木札の絵)、彩色巻軸画(色つきの巻き物絵)、紙牌画(紙札の絵)など珍しいものが用いられ、また儀式の進行と同時に踊られる古典舞踊は芸術性が高く見る人の心に残ります。



署神を祭る儀式



木牌画をつくる老東巴

木牌画

木牌画とは木の札の上に絵を描いたものです。長さは約60cm、幅は約10cm、厚さは約1cm。頭部が山型のものと平たいものの二種があります。山型のものには神の姿を描き、平たいものには鬼の姿を描きます。現在の木牌画では赤、黄、青等で彩色され、画面が艶やかで人目をひきつけます。

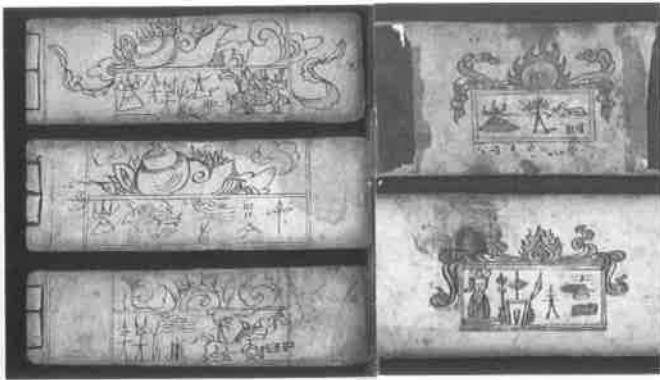
木牌画の内容は『東巴画譜』を手本にしますが、各東巴は下書きなしに即席で、一気呵成に描くので、東巴ごとに独特の画風が形成されます。



署神の木牌画

竹筆画と経書の表紙

“竹筆画”とは東巴がつくった竹製の筆で東巴経書に描いた絵のことを言います。主として経書の表紙の装飾画のことです。経書の扉絵と題図も竹筆画です。普通はその経書と同じ内容の絵です。彩色がほどこされており、主題を表象して内容の芸術的効果を高めています。



東巴経書の表紙

画 譜

画譜は木牌画から発展してできました。木牌画は量が多すぎて、内容も繁雑を極め、一度にたくさんの神や鬼、鳥、動物などを描くことはたやすいことではありません。そのため木牌画を画集にまとめてそれをもとに描けるように、これら神や動物たちの形象が固定化、類型化される必要が生じてきました。そこで絵画の才に秀でた大東巴がこれらの木牌画を継承、整理して再創作し、後世の人々に“画譜”として残したのです。画譜はその内容が豊富で画法も個性を失わず、かつ芸術性も高いので木牌画よりも珍重され、名家の作は逸品として後代に伝えられます。



木牌画「風を祭る」



東巴経「白コウモリ取経記」



木牌画「風を祭る」

東巴経書

審美的な観点からすれば一巻ごとのナシ東巴経書はそれぞれ一冊ずつの書画集です。というのはその経書に書かれているナシ象形文字はもともとは一つ一つが原始的な絵画であったからです。東巴経書の大部分はナシ族の象形文字で書かれているがこれらの文字は中国内外の文字学者の間で現在世界で唯一の“生きている象形文字”と称され、人類の文字の発展史上で重要な学術的価値を有しています。

現存する2万冊余りの東巴経書のうちの大半は雲南省の麗江、昆明、そして北京、南京等の図書館に修蔵され、それ以外のものはアメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア等の図書館及び博物館に収められています。またいくつかの東巴の家にも少量の経書が家宝として保存されています。

占卜経



巴格図（原始蛙の八卦図）

ナシ族は占いがじょうずです。東巴経によると360種もの占いの方法があり、驚くべき様々な占卜の経典もあります。その中でも蛙形を中心に置いた「巴格歴算図」はきわだった特長を持っています。この図は東、南、西、北、中の五方と木、火、鉄、水、土の五行のそれぞれに陰と陽を配して、（漢族の十干に対応）巴格八門（四方と四隅）に十二の属相を当て、（漢族の十二支に対応）巴格の四方と犬、牛、龍、羊（四隅）で八卦の方位を表し、十二属相と陰陽の五行とで漢族の六十支に相当する六十序数を構成しています。

占いの内容は個々の人間の生老病死、衣食住、穀物の出来不出来、家畜の盛衰、商売の損益、旅行の吉凶、戦争の勝敗等人々の生産生活や社会関係と緊密に結びついているものです。



占卜経



占卜経

舞踊画（東巴教書中）



東巴舞踊「神舞」



東巴舞踊画



東巴舞踊画

巻軸画

巻軸画は東巴が鉱物質の顔料で布の上に描いた神像画で、大量に存在します。巻軸画がはそのほとんどが主神（至尊神や護法神）を中心に、四方に戦神や鳳凰、龍、獅子、白いヤク、赤虎、東巴経の縁起のいい符号を配したもので、東巴経の儀式の時に祭壇の正面



東巴経の最高神「薩英威徳」

上方に掛けます。儀式の種類により、異なった巻軸画を使います。

東巴の巻軸画はナシ族の伝統的な芸術の風格を基礎として、中国仏教や道教、チベット密教の画風を吸収、融合したもので、特に元、明以来のチベットの「タンカ」神の巻軸画がの影響を強く受けています。



東巴教の祖先神「東巴什羅」

神路図

神路図は葬式儀礼に際して使用される絵画で、死者を神霊の世界に導くためのものです。この神路図は東巴の絵画芸術の中でも傑出した大作で、全長15—20メートル、幅は30センチメートル余りあります。多くは布または麻布の上に白い染料を塗った後に描いたものであり、紙でできたものもあります。

神路図の内容は33の神界と人間界および18の鬼の世界の3部に分かれていて、360を越える生き生きとした人物、神、鬼の絵と70余りの奇妙な動物たちの絵が描かれています。これらは絵巻物のよ



神路図「地獄の鬼」



神路図「神鵬と署龍の斗争」

うな連還画形式で描かれ、神話や故事、教訓がちりばめられてナシ族の祖先たちの生命意識を反映しています。この意識はナシ族の伝統的なものと、チベット仏教から影響を受けたのが融合した死生観であり、次のようなものです。『人間の死後も靈魂は不滅であり、その靈魂は18層の鬼の世界や様々な怪物たちに妨げられながら東巴の導きによってようやく祖先の靈魂が住んでいる所に辿り着き、祖先と団欒した後、33界の神地に着き、神の庇護を受ける』。神路図は神や鬼の姿を借りて、ナシ族が追求した光明と幸福の願望と勸善懲惡思想、人生を善で全うする倫理や美学が表現されています。

上記「東巴文化芸術」は 雲南省科学院麗江 東巴文化研究所編（雲南美術出版社）より抜粋したものです。

編集後記

舞踊文化 E.T.C は年三回発行予定
※皆様からの投稿も歓迎（薄謝提供）
平成 9 年 3 月 20 日
財団法人 傣民族舞踊文化財団
東京都港区赤坂 3-10-3
電 話 03-3583-3633・3606
FAX 03-3583-3639